

令和3年度 第1回千葉県博物館協議会会議 議事録

日時：令和3年8月26日（木） 午前10時00分～11時55分

会場：オンライン開催（事務局：千葉県立中央博物館 講堂）

出席者：（※ オンライン出席）

委員	西田委員（議長）、高橋委員※（副議長）、前林委員※、 篠崎委員、細井委員、関沢委員※、米本委員※
博物館	美術館：倉原館長※、鈴木普及課長※ 中央博物館：古泉館長、植野副館長※ 現代産業科学館：鈴木輝人館長※、竹内学芸課長※、植野普及課長※ 関宿城博物館：鈴木淳一館長※、尾崎学芸課長※ 房総のむら：望月館長※
文化財課	田中課長※、学芸振興室：立和名室長※
事務局	中央博物館：島立企画調整課長、相原上席研究員、 吹春上席研究員（記録）、水野研究員、石井研究員

※ 配付資料確認【事務局】

- 1) 座席表、議事次第
- 2) 協議会委員名簿、出席者名簿
- 3) 議事資料 県立博物館・美術館における学校教育及び研究機関・団体との連携
 - ・補足資料：県立博物館・美術館の施設概要と現況
 - ・補足資料：「県立博物館・美術館の今後の在り方」について（第三次答申）
 - ・補足資料：令和2年度 県立博物館・美術館 自己評価資料

1 開会【事務局】：午前10時00分

委員10名のうち7名の出席（うちオンライン4名）により会議成立。
傍聴者なし。

2 あいさつ【中央博物館・古泉館長】：午前10時04分～10時06分

3 行政説明【文化財課・田中課長】：午前10時07分～10時14分

4 議事：午前10時19分～11時40分（別紙参照）

5 諸連絡【事務局】：午前11時40分～11時55分

6 閉会：午前11時55分

(別紙)

【議事】

○西田議長：

議長の西田でございます。本日も活発な御協議よろしくお願ひ申し上げます。

○西田議長：傍聴者は本日もございますか。

○事務局：いらっしゃいません。

●議事「県立博物館・美術館における学校教育及び研究機関・団体との連携について」

○西田議長：

それでは議事にはまいります。今回の話題は2つあります。まず「1 学校教育（小・中・高）との連携」について。議事資料に沿って各館から説明をお願いします。

○事例報告 1

【美術館・倉原館長】（資料 2 頁）

【中央博物館・植野副館長】（資料 3 頁）

【現代産業科学館・鈴木館長】（資料 5 頁）

【関宿城博物館・鈴木館長】（資料 7 頁）

【房総のむら・望月館長】（資料 8 頁）

○西田議長：

それぞれの館の特性に応じて、また新型コロナ等の状況に即した様々な行事等の説明をいただきました。委員の皆様、御質問・御意見をお願いします。

○篠崎委員（意見・質問）：

私が学校で勤務していたときの経験から申し上げさせていただきます。子どもを引率して博物館に見学に行ったり、博物館の方に出張事業で、学校に来ていただくということは、以前から実施しておりましたが、どちらかというと学校側の一方的な要望に基づいており、計画性があまり無かったように思います。

学校と博物館が連携していくためには、学校側としては先ず、各学年の年間指導計画の中に、博物館活用の行事を明確に位置づけていくことが必要なことだと思います。そうし

なければ、学校の博物館利用については、計画性がなく思いつきの行事となってしまうような気がします。

また学校側からすると、博物館でどんな活動をしているかということについて、分かりづらいところがあります。学校からの要望やニーズを把握していただき、博物館からの働きかけや情報発信も、より必要なことかと思えます。また博物館を子どもにとってもっと親しみある場所にしていくためには、先ず教師がどれだけ博物館のことを理解しているかという点が大切なことだと思えます。

そこで質問ですが、教員に対しての研修等のシステムもあると思えますが、現在の各館からの学校への働きかけ、情報発信の取り組み等についてお伺いしたいと思えます。

○植野中央博副館長（回答）：

学校行事の年間のサイクルに博物館を位置づけていただくのが重要であるということは認識しております。そのため、次年度の学校行事予定が組まれる前年の暮れから新年にかけての時期をターゲットとした広報宣伝を、各館が重点的に行っております。

また学校の先生への博物館に係る情報提供につきましては、県教育委員会としまして、総合教育センターが実施している教職員研修の中に、博物館の利用という枠を設けております。そこに全館が参加し、博物館を利用するところのような授業ができます、このようなプログラムができます、という具体的な事例を紹介する研修を行っております。あわせて、各博物館は夏休みの時期に教員を対象に半日から3日ほどの博物館利用に関する研修を行っております。

○前林委員（意見・質問）：

小学生や中学生にとって、たとえば県立美術館は、「子ども県展」等の行事で、自分の作品が展示されるハレの舞台です。小・中学生にとって、自分の作品が飾られるように頑張ろう、という強い気持ちやあこがれのある場所が美術館です。

しかしまた小・中学生には、博物館や美術館に「行こう！」「行きたい！」という気持ちが少し弱いように感じております。その理由のひとつに、教員や保護者という大人がまだその魅力を身近に感じていないということがあるかもしれません。子ども達へアプローチするためには、まず教員や保護者への魅力の宣伝も重要なかもしれません。

それでは学校現場の立場から意見を列挙しながら述べさせていただきます。

《校外学習》

秋季は、学校にとっては校外学習として外に出て学習する時期です。しかし、その行く先の選択はなかなか難しい。条件としては、雨でも行ける、バスが停まれる、食事ができる、というのが条件です。そのような点で、博物館・美術館は条件をクリアしています。新型コロナの時期ではありますが、博物館・美術館が学校の郊外学習等を受け入れる条件

をクリアしていることをもっと広報することにより、利用拡大を図ることができるのではないのでしょうか。

また学校が、博物館・美術館を利用しようと思った段階で、それでは、今、どんな行事や展示をやっているのか、どんな体験ができるのか、というのを調べる時に、やはりウェブサイトを拝見致します。各館のウェブサイトでの上手な宣伝は、その利用を促進していく上でも、とても重要なことだと思っております。

《タブレットの活用》

現在学校ではタブレットが導入されました。これからの総合的な学習の時間や図工の時間の中で、博物館・美術館のプログラムが使えるようになれば、子ども達にとってさらに身近な存在になるでしょう。さらにタブレットは自宅に持って帰ることもできます。自宅で保護者も一緒に見ることもできますので、学校のタブレットを通して保護者へ向けた博物館・美術館の宣伝も可能になるのではないのでしょうか。

《博物館職員と学校の交流》

今回、教員向けの研修の実施について伺いました。しかし教員の研修は、どうしても若い世代や興味のある人に向けての研修になりがちです。そのため、可能なら博物館・美術館の方々に学校に直接来ていただき、管理職も含めた学校職員と意見交換ができれば、博物館・美術館に関する行事等を学校行事等に反映させやすいと思います。また各学校はそれぞれ充実した図書館やビオトープなどの様々な施設をもっております。博物館や美術館のスタッフに学校に来ていただいた時に、そのような現場に直接アドバイスをいただけるようであれば、学校と各館がより深い関係を築いていくことができるのではないのでしょうか。

《週末プログラムの実施》

また現在の週休二日という制度ですが、小・中学生はまだこの土日をうまく使えていないようです。そこで、例えば土曜日をターゲットにした博物館・美術館のプログラムを組んでいただければ、土曜日曜という週末をより有効に使えるのではと思っております。

《移動博物館・美術館》

他県の例ですが、移動博物館・美術館、という仕組みがあるようです。千葉県でも実現し、各学校に来ていただければ、ありがたいと思っております。

○西田議長：

それでは次の話題に移ります。「2 研究機関・大学・団体との連携」について、議事資料に沿って各館から御説明をお願い致します。

○事例報告 2

【美術館・倉原館長】（資料 2 頁）

【中央博物館・植野副館長】（資料 3-4 頁）

【現代産業科学館・鈴木館長】（資料 5-6 頁）

【関宿城博物館・鈴木館長】（資料 7 頁）

【房総のむら・望月館長】

○西田議長：

各館における研究機関等との連携について説明をいただきました。時間の都合もありますので前半の話題も含め総合討論ということで進めたいと思います。まず後半の話題につきまして、研究機関・大学の立場から関沢委員、高橋委員、それぞれ意見ををお願いします。

○関沢委員（補足説明・意見）

今回御紹介がありました、国立歴史民俗博物館と千葉県立中央博物館との協定に関して補足いたします。

協定を締結する意義についてですが、二つの組織がより安定的・継続的に研究が共同で実施できるというメリットがあります。すなわち協定という連携で、互いの研究が広がり、深まります。その結果、例えば成果公開として博物館における展示に反映させることができます。今回紹介いただいた「勝浦市における展示会」のように、共同研究の成果を地元で展示会の共同開催というかたちで公開することができました。また、令和 2 年度の「昆布とミヨク」という国立歴史民俗博物館の展示にも、研究の成果をふまえて千葉県立中央博物館の共同研究員の方に協力いただきました。また国立歴史民俗博物館の施設「くらしの植物苑」展示解説会等につきましても、千葉県立中央博物館から職員を派遣いただいております。

このように協定をむすぶことで 1 館だけではできないような事業のスムーズな実施が可能となります。

○高橋委員（意見・質問）

大学では学生を様々な現場に送り様々な経験させるという、サービスラーニングが実施されており、また同時に地域連携ということも求められています。そのような繋がりですと、博物館・美術館はすこし受け身としての立場となるのでしょうか。もうひとつは、大学スタッフの技術や知識を生かしての連携ということもあります。ここでは、ざっくばらんに伺いますが、博物館・美術館から、なにか大学と連携をし、大学に求めていることなどがございましたら紹介いただけるのでしょうか。

○植野中央博副館長（回答）：

ひとつの例として、博物館の行事はどうしても子ども向けの行事やイベントが主体となり、大人向けの行事についてはどうしても手薄となります。そのような大人向けの行事について、大学と連携し取り組んでいくことができれば心強いかぎりです。

また、他の研究機関との連携ですが、先ほど御紹介した災害標本レスキューという研究資料の救済についての事業のような研究機関や大学どうしの「共助」という取り組みが今後ますます重要になっていくのではないのでしょうか。

○高橋委員（質問）：

様々な研究機関やどうしの連携には、「機関という組織の間で協定を結ぶ」と場合と、「研究者という個人間の連携」という2つの場合があると思うのですが、組織が協定を結ぶ積極的な意味について教えてください。

○植野中央博副館長（回答）：

組織が協定を結んで行う事業に比べ、個人の研究者間の連携は、その活動が見えにくいということがあると思います。協定を結ぶことにより、これらの活動が顕在化し、互いの組織の特性が明らかになり、それぞれの組織や職員の役割が明確となり、その結果、組織の価値が高まるという効果もあるのではないのでしょうか。

○高橋委員（意見）：

組織どうしが協定を結ぶときに、協定によって何が出来るか頑張って考える、そこで新たに何かが生み出されるという効果も、協定にはあるかもしれませんね。

○細井委員（意見）：

私たちの団体「千葉県子ども会育成連合会」は、幼児から大学生、またその親御さん達というメンバーからなる団体で、それぞれ子ども会をつくり、野外活動、奉仕活動、遊びを中心とした活動等を実施し、またその活動支援を行っております。そのため、私どもにとって、博物館・美術館は「こども会」の活動の場であり、また各リーダーの研修の場で

もあります。そのため、それぞれの施設が子ども会の活動の場所となりうるのか、またリーダーの研修に使えるか、という視点で博物館や美術館を拝見しております。また目的とする施設が、安全にアクセスできる場所にあるのか等についても、重要な検討項目となっております。博物館・美術館との連携ということを考える場合、そのような視点で私たちがアプローチしていることをご配慮いただけるとありがたいです。

また博物館・美術館に対する私たちの希望としては、できるだけ体験できるメニューを増やしていただきたいと思っております。また、増やしていただくと同時に、大多喜城分館で実施されている甲冑体験などの人気のメニューがありますが、指導者の数の問題で団体での体験は難しいですと言われてきたこともありますので、人気の体験などについては団体でも十分体験できるような体制を整えていただけるとありがたいと思っております。

○米本委員（意見）：

コロナ禍という厳しい状況の中で、各館の様々な取り組みの御紹介ありがとうございました。これまでと異なる日常がはじまって1年半ほど経つわけですが、いろんな行動が抑制され、これまでとは違ったことを考えないといけない時代になっているのだと思います。このような状況の中で、これからどうやっていくかということですが、やはりウェブ上で情報を発信し続ける、ということが大切ではないかと思っております。

いつかは、新型コロナ騒動も終焉を迎える日がやってきます。そのときに、皆さんが博物館・美術館に行ってみたいな、という気持ちになることができるような、そのための取り組みがこの新型コロナ禍の期間の中で求められていると思います。様々な事業を対面で実施することの良さということは、十分わかるのですが、それができなくなった今、博物館・美術館の魅力をもどくように発信していくのかということについて努力していくことだと思います。予算も必要ですが、例えばバーチャル美術館・博物館というものを作り、皆さんにどのように入ってきていただけるか。そして入ってきた方々が、次は実際に博物館・美術館に行ってみたいなと思わせる仕組みや仕掛けを、どのように作り上げていくのか、ということはこの時期考えていかなければならないことだと思います。

例えば本日のようなズーム会議は、遠方の人でも参加できる仕組みです。オンラインならば、千葉県の北の方に位置する関宿城も、県内の南の方々も容易に参加できることになります。このような仕組みを生かした、セミナーや研修を行い、各館の魅力を発信していく、あるいは各学校などに積極的に呼びかけていく、そのようなことをやっていくのが、このコロナ禍の時期なのかもしれません。

今回の会議に先立ち「博物館のありかた」（第三次答申）の紹介があり、その中でも情報の発信ということが強調されてきました。その情報の発信をこのコロナ禍の時期にやっていくことが大切だと思います。そして博物館・美術館が、魅力ある存在として人々をひきつけ続けられるのかどうか、ということだと思います。各館が存続するための、その準備のための期間であるという風に、この時期を捉えていただきたいと思っております。

○西田議長（まとめ）：

ありがとうございます。今回のオンライン会議もそうですが、私たちが何気なく使ってきたウェブの仕組みが、もっと使えるのだということを思い知らされたのが今回のコロナ禍だったのかもしれない。

今回の最初の話題の「学校教育との連携」については、これまでの会議でも何度も意見を述べさせていただいており、繰り返しになりますが、次の仕組みが必要なのだとおもいます。すなわち、「1学校の博物館・美術館の利用を必須とする仕組みの構築」、そして「2学校の博物館・美術館の利用のための予算措置」、この2つが学校教育の中の仕組みとして確実に担保されていないと、学校の博物館・美術館の利用の促進はないと思います。加えて「博物館・美術館の利用についての地域差の解消」も考えておかねばなりません。どうしても学校ごとに、博物館・美術館から、遠い・近い、という環境の差があります。またどんな施設が、どんな環境の学校の近隣にあるのかということも重要です。たとえば自然豊かな勝浦あたりの学校だと、美術館に行くというような選択もできる仕組みをつくるということが地域差の解消に繋がることだと思います。そのうえで、千葉県の教育体系の中で組織的かつ有機的に、学校教育の中に博物館・美術館の利用を組み込んでいく、すなわち根本的な制度設計をしていくことが大切かと思います。

また次の話題「研究機関・大学・団体との連携」について、特に今回は博物館・美術館と研究機関の協定についての紹介がありました。研究というのは、様々なレベルの繋がりがあって成り立っているものです。今回は協定の良い面の紹介がありました。しかしながら協定のかたちをとらない、研究者どうしの緩い連携も重要です。協定が結ばれていない、というような理由で、例えば個人レベルの研究者どうしの繋がりが妨げられたり、調査や研究交流などが制限されるようなことがあってはなりません。博物館・美術館の研究者が、多方面で、様々なレベルで活躍できる仕組みを、協定を含めてつくっていかねばならないと思います。

○西田議長：

これで議事のほうは終了したいと思います。事務局に議事の進行をお返しします。

○事務局：

次回の協議会は、今日の話題を引き継ぎ、博物館・美術館と地域との連携、について委員の皆様にご意見をいただく予定です。よろしくご意見申し上げます。また本日の議事録につきましては、追って委員の皆様にご確認をいただき、ウェブサイトにおいて公開させていただきます。

以上で、本日の会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。